

被災地で手芸を「仕事」にする

かみだ
金谷 美和

民博 外来研究員

商品の価値を決定するのは、品質や作り手の技術だけではない。人びとがそれに対して抱くイメージが価値判断に作用することもある。今回で最終回を迎える「手芸考」では、市場に映し出される「手芸」のイメージを被災地の事例から考える。

被災者の癒しを目的とするものや、収益を被災地に還元することを目的とするものがあった。そのような活動から、商品を製作して、手芸を仕事にしようとする女性たちがあらわれている。収入と社会的認知を得ることにやりがいを感じる反面、手芸に対する価値付けの低さから仕事にしがらみ状況もある。

手芸で時間をやりすこす

なごみ会は、宮城県石巻市の仮設住宅に暮らす、武山たか子さん、武山幸子さん、三條照子さんが集まる手芸グループである。集団移転地の整備に時間がかかり、震災から七年経過した今でも仮設住宅から出られないでいる。震災の年の初盆のころ、彼女



なごみ会のメンバーが製作した布ぞうり(2015年)



亡くなった児童の供養のため、被災地ではお地蔵さんのマスコットが作られた。これは、お寺に奉納されたお地蔵さん(2013年)

たちが最初に作ったのは、お地蔵さんのマスコットだった。この地区では、津波で大勢の子供が亡くなった。孫の供養のために、お地蔵さんを作ることが慰めになったという。同じころ、ボランティア団体がひらいた手芸の集まりに参加して、気の合う仲間

二〇一一年に発生した東日本大震災の被災地では、ボランティアの先導でものを作る活動が数多くおこなわれた。それらは、どうしでなごみ会をつくった。

忘れるためにやってたんだ、と照子さんは言う。仮設住宅に一人で座っていると、将来の不安がよぎって、いろいろなことを考えてしまう。だから、何かすることがある、というのとても良かったのだという。女性たちの多くは、三世帯同居の広い家で家事や育児を切り盛りし、農業や漁業などの家業を担い、日々忙しく働いてきた。津波で家や仕事を失い、突然することがなくなってしまうのである。

手芸を仕事にする

震災から八カ月経ったころ、彼女たちは布ぞうりの製作を始めた。生業の再開が遅れるなか、収入になる手仕事を選択したのだ。ボランティア団体が、被災地の雇用創出を目的として取り組み始めたもので、現在は、一般社団法人あゆみが運営する「ふっくら布ぞうりの会」として事業化されている。布ぞうりとは、従来はワラを素材として作られたものを、布で作るようになったものだ。これまでの布ぞうりは、編み目がゆったりして素朴なものが多かったが、この会が作るうとしたのは、特別な技法に基づいてしっかりと編み込まれた、デザインが洗練されたものである。一般的な布ぞうりの価格は一五〇〇円前後であるが、この



仮設住宅の集会所でおこなわれた、布ぞうりの編み手さんたちの集まり(2015年)

会のもものは五〇〇円以上であり、ネット販売されている。

照子さんたちは、技術を習得して、布ぞうりの編み手になった。会から発注がくると、編み手は仕様にしたがって製作し、製品は検品を経て買いとられる。会は布ぞうりを、技術に裏付けられた「職人の仕事」と位置付けており、品質の維持に心を配っているために、厳しい検品を実施している。検品にとおらないものは、編み手に返され、自分で販売先を確保しなければならない。彼女たちは、仕事としておこなう手芸の厳しさを感じている。

一方で、この仕事に楽しみも見出ししている。ほかの地域で製作する仲間と交流したり、集まりの様子をSNSで発信したりしている。会のウェブサイトにはなごみ会のインタビュー記事が掲載され、地元テレビでも取り上げられるなど、社会的な認知を獲得したことや、自由に使える収入を確保していることが、自信と達成感につながっている。

「職人仕事」と「手芸」

震災から年数が経つにつれて、復興支援のイベントが少なくなり、なごみ会は、検品からもどされた商品の販売先を見つけるのに苦労している。地元で、女性の手芸品が販売される場所のひとつとして、道の駅がある。ここでは、女性の手芸品が比較的安価で販売されている。なぜなら、手芸は女性の趣味の創作活動であるため、そこから生まれる商品の価格も低いという通念が定着してしまっているからである。なごみ会の布ぞうりは、検品にとおらなかったとはいえず、「職人仕事」である。にもかかわらず、道の駅では品質に見合った価格を付けてもらえないという事態が生じている。「手芸」に付された趣味的、女性的なイメージが、手芸を「仕事」として成立させることとの障壁になっているのである。